

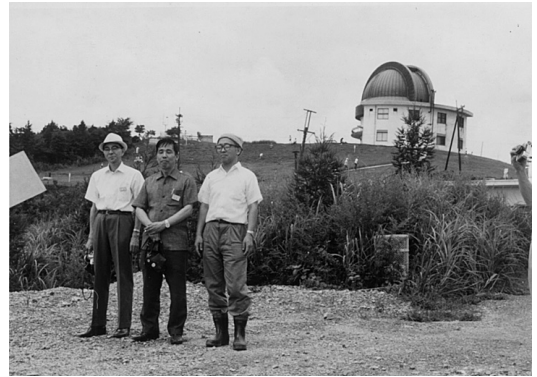
富田弘一郎さん追悼のこぼ

斎藤馨児 (元 東京天文台)

富田さんと初めて話をしたのはいつだったか、戦後すぐの11月、御茶ノ水医師会館の神田天文学会例会だった気がします、もっと早かったかとも思います。すでに当時、富田さんの名前は天文好きの若者のなかで有名であり、富田さんの母校青山学院のすぐ後輩に原 恵さんがいて、こちらは、わが家と隣り合わせでしたから。

富田さんは、天文学のよい先生と出会うことができました。1942年まで二十余年間、東京天文台にいらした神田 茂さんです。神田さんは仕事のかたわらアマチュア天文家の育成に努めました。天文学ではアマチュアの役割が他の学問分野で考えられないほど大きい。なぜなら天文現象はやり直しできず、現象そのものに“時間”という繰り返し不可能な要素が必ず入るからです。また対象が無数にあって専門家だけで対応できません。今でも日本天文学会会員の過半数はアマチュアでしょう。神田さんは変光星や流星の観測を奨励し、親切に指導されました。門下からは専門家も多く輩出し、広瀬秀雄さん、古畑正秋さんはその代表格です。神田さんは天文台を退くと湯河原へ移り、日本天文研究会 (NTK) を設立されました。富田さんは最初から会員でした (『日本アマチュア天文史』恒星社、1987)。

富田さんは力学や天文計算より望遠鏡や天体観測に興味があり、私の対象と同じだったから、すぐに意気投合しました。観測は流星、彗星、変光星と多岐にわたりました。最初の共同観測は、肉眼で見えない6等級以下の小流星の高さを測ろうということでした。それらは高いところで光るため明るくないのか、流星体が小さく、低い高さまできてようやく光るのか。わが家と富田さんの家まで数キロでしたが、この区別ならできそうです。1946年1月、四分儀流星群の活動する3日、4日の朝、望遠鏡を北極星へ向けて2点観測をしました。これは明確な結論を出せませんでした



堂平観測所での富田さん、左は下保 茂さん (1965年ころ)。

が、私は富田さんから、その後も絶えずアイデアを持ちかけられ示唆を受けてきました。あれ以来六十年間、決して裏切らずいつも助け合える友人同士だったことを誇らしく思います。

富田さんは1947年に東京天文台に入ってから、毎月のNTK例会にはかならず顔を出して歓談されました。望遠鏡については特別詳しくて、古くからの天文台や、個人の望遠鏡のことをよく知っていました。観測者ならずとも、読めば必ず心が躍るだろう富田さんの名著『彗星の話』(岩波新書、1977)は、過去の研究用望遠鏡の選定について鋭い評価と批判を述べています。大型望遠鏡や写真儀を駆使するに当たっての苦労話もあります。日本の光学観測天文学の進展を記した「望遠鏡と観測器械」(『続・日本アマチュア天文史』所収、恒星社、1994)は研究用の各種望遠鏡についてまで詳しく書いていて、富田さんが相談を受けたもの、指導して作られたものがどれほど多かったかもわかります。

星を見たいと思う人たちにとって、きびしい使用環境に耐えて良い像を結ぶ望遠鏡は最低限必要です。このことは生物顕微鏡なども同じでしょう。それは子どもたちが星や生き物を好きになれるかどうかの決め手となるだじな要素です。と



望遠鏡を覗く富田さん（1972年，関戸勇氏撮影）。

ころが戦前はもちろん戦後の50年代まで，有名な光学器械店を訪ねても，少し費用を惜しむとあやしい器械しか求められませんでした。一般向け望遠鏡の光学的，機械的精度が格段に向上するのは60年代からです。そのことの達成に向けて富田さんの傾けた努力とその功績は（反発まで受けつつ富田さんの考えを掲載し続けた『天文ガイド』誌とともに）大きかったと思います。

天文という科学が他の物理や化学と違うのは時間の要素が本質的なことです。地球物理や地質学にも時間要素は入りますが，それは歴史的時間です。天文は今の時間が圧倒的な意味をもちます。観測者ならだれでも時は待たなければ訪れず，去ればふたたび戻らないことを，ときに痛みさえ覚えて経験しているでしょう。だから富田さんは観測を大切にしました。整理は後にして，とにかく観測しておくのが富田方式でした。彗星も流星もその観測はいうなら時間との戦いです。

一度だけ富田方式の失敗したことがあります。1977年3月11日の日本では早朝，天王星が恒星を隠すまれな現象が起こりました。アメリカは望遠鏡を載せたジェット機をインドへ送りました。日本は現象の起こる時間帯が悪かったけれど，富田さん一人は，直前に車で堂平へ走って望遠鏡を向け，光電測光を強行しました。記録紙の描いたデータはよく見ると環の存在を示していました。

だが富田さんは朝の地上に（宇宙研か，事業団かの）約束があって，記録をその場で点検する暇もなく山を下りてしまったのです。そうこうするうち，国外から環の発見速報がとびこんできました。役に立つ協力者がそのとき山にいたらと悔やまれます（『理科年表1978年版』天98）。

堂平観測所で富田さんは，東大関係の人たちだけでなく，日本全体の研究者や大型望遠鏡にアプローチしにくい地方大学の学生のため尽力しました。これは所長を兼任されていた古在さんが富田さんのよき理解者であったことが幸いしています。協力は観測装置の開発や整備からじっさいの観測計画，実行に至るまで，親切をきわめていました。富田さんの撮った彗星・流星写真や測光データも惜しみなく提供されました。それらは卒論や学位論文の作成に使われ，専門誌に発表されたものも多数あります。富田さんはすべての研究において，いつも謙虚でした。じつは彗星頭部の物質噴出や尾のプラズモイド現象など，分析されていない記録がまだたくさん残されているはずです。どこに保管されているか，渡部潤一さんなら知っておられるかも。

ご自宅に近い無量寺で行われたお通夜の夕は，強い驟り雨が雷鳴を伴って駆け抜けていきました。雨の下で，国立天文台にいて天文教育の指導者でもある縣 秀彦さんが，隣からこう話しかけてきました。「地学教育の学会に出ると，天文はアマチュアが認知されて多人数参加し，高校生でも学会で発表できるシステムができている。他の分野にはないことでうらやましいといわれます。その基礎を築く中心におられたのが富田さんでした。いくら感謝してもしきれません」。私はすぐ応じました。それを富田さんにいったら，こう答えると思いますね。

「神田先生が僕にして下さったことを，皆さんにしようと考えただけですよ」

そうですね，富田さん。